

欧米におけるカレン族文献調査の旅

飯 島 茂

タイ国村落調査計画の一環として、西北部のメーホンソーン県で8カ月にわたってカレン族の第2回調査がおこなわれた。その後わたくしは、昨年8月3日の夜にバンコクを出発して、ロンドンに向った。この旅行の目的は、岩村忍所長の御幹旋により、アジア財団からの寛大な援助がえられたので、イギリスとアメリカで3カ月にわたって、カレン族関係の文献や資料を収集するためである。

途中日航のジェット機がインド上空でエンジンの故障をおこして、カルカッタにひきかえすといったおまけもあったけれども、長途の旅を無事におえて、現地時間の翌4日の正午頃元気にロンドン空港に到着することができた。

飛行機のタラップから一步出ると、北国のつめたい風が骨までしみ通る。これはいったいなんという気候なのだ。ロンドンがいくらヨーロッパの北部にあるといっても、いまは8月、盛夏ではないか。それなのに、空港の寒暖計は20℃あたりをさしている。昨日までのバンコクの気温にくらべると、10℃以上も違うのである。これでは“寒く”感じるのも無理はない。空港からダウン・タウンへ向うリムジンのなかから、夏だというのに合服やスプリング・コートを着て町を行きかう人々を眺めながら、洋服の故郷を知る。この風土的な条件をいっさい考慮にいけないで、セビロを日本の暑い夏や熱帯の国々に持ちこんでいるわれわれは、よほどどうかしているのだろう。

このようなとりとめもない事を考えているうちに、車はホテルに着く。早速旅装を解くと、ホテルからはど近い大英博物館に行くことにする。途中で“Sir, could you kindly show me the way to the British Museum?”と、中学校で教えてもらって以来このかた一度も使ったことのない当地風の英語で道を尋ねる。“アイト・ブロックス、オーヴァー”といいな

がら左の方をさし示す。早口のロンドンなまりは聞きとりにくい。答のくりかえしを頼むと、かれはさらに早口に“アイト・ブロックス、オーヴァー、サー”をくりかえす。わたくしはそれを口のなかで二、三回反芻する。そうだ、“アイト・ブロックス、オーヴァー”とは“エイト・ブロックス、オーヴァー”のことなのである。

このカクニーをつぶやきながら、しみじみと異国に米た思いをあらためてかみしめる。さっきの人が教えてくれたように、8丁も行くと大英博物館の前に出る。マルクスが資本論を書いた所にふさわしく、この建物は重厚な雰囲気包まれている。

まず受付に行き、図書室の入場証を発行してもらう。アジア財団からもらった紹介状のおかげで、イギリスの図書館や大学などではずいぶん助かった。この国は伝統的にクラブのような“排他的”な制度を発達させた国だけに、わたくしのような外国人や新参者にはいささか取り付きにくい面のある所である。

しかしながら、紹介状を入手すると（日本のように簡単には書いてくれないけれども）、この国の人々が他人を受け入れるのに構えている10ぐらいの障害物を、自動的に5つぐらいは飛び越えられる。かくして、わたくしは大英博物館における文献調査を順調に開始することができた。

よく知られているように、ロンドンの宿は朝食つきである。わたくしの泊っていた所でも、それは例外ではない。毎朝、オートミルやトーストとベーコン・エッグスの変りばえのしない食事を紅茶でどに流しこむと、いそいそ大英博物館に向う。目と鼻の先の距離ではあるが、それでも9時の開館よりも早く着くこ



写真1 水稲の収穫をするカレン族の女

とが多い。だが、これはわたくし1人だけではないようである。かなりの数の常連が毎朝顔を合わせる。ひとつにはかれらが1日中暮す図書室で良い席を取りたいという気持から、早く来るのだろうけれども、同時にここにはよその図書館にない“なにか”があるからではないだろうか。わたくしも長期間にわたってタイ国北部の山岳地帯で、水牛の数をかぞえたりなどして暮してきたために、すっかり重症の知的飢餓状態におちいついたのだろう。たちまちこの“なにか”のとりこになってしまい、大英博物館ではいつになく勤勉に仕事をする。このような例はほかにも意外に多いようだ。常連のアメリカ人の歴史学者は「わたくしの国にもずいぶん良い図書館があるけれども、今までこんなに雰囲気の良い、わたくしをシビレ (intoxicate) させた所はなかった」と述懐していたのがたいへんに印象的であった。



写真2 大英博物館の入口

たっぷりとした皮張りの机と椅子に本拠を構えようと、カーボン紙のついた申し込み用紙に1冊ずつ著者名、題名、発行年月日、整理番号、自分の名前、机番号を書き入れて、窓口に出す。またリザーブしてある本ならば、古いカードの写しだけを窓口に出す。そうすると、30分もしないうちに金髪の女の子が机の上に山と本を置いていつてくれる。ここには貸出しの冊数の制限がないので、いつも百年物の本を机に山積しておくことができるのは嬉しい。

アメリカの人気のすくない図書館にくらべると、ここは労働賃金が安いせいか、いつもふんだんに係員がいて、サーヴィスがたいへんにゆきとどいている。これはひとつにはイギリスにおける研究者の地位の高さを示しているのではなかろうか。大英博物館に限ら

ず、どこに行っても仕事に関しては大事にもらい、恐縮する。

到着当時はたいへんに苦痛であったロンドンの“寒さ”にもしだいになれる。そうすると人は勝手なもので、寒い所の方が人間の頭脳労働には適しているのではないかと思うようになる。熱帯においては、エアー・コンディッションがないと、よほど風通しのよい所でない限り、本を前にして机に二、三時間もむかっていることは、あまり楽ではない。これを1週間も続けると、へばってくることはしばしばである。それにひきかえて、この自然環境は文化的環境とともに、研究生活になんと好適なのだろう。加えて、前述のように、わたくしは知的飢餓症にかかっていたために、週日は開館の朝の9時から夜の9時まで大英博物館で過ごし、すこしも苦にならなかった。そのうえ、ここにはすばらしいアトラクションもある。仕事に疲れれば地下にある喫茶室に行き、紅茶を飲んで、帰りがけには陳列室に行く。そこでは見事なドンソン・ドラムやロセッタ・ストーンを見て、頭の休養をとることができる。こんなにぜいたくな文献調査は、世界中どこにいてもできないだろう。

とにかく、大英博物館における好条件のおかげで、仕事は意外にはかどり、カレン族の民族誌や歴史関係の文献資料だけでも、30点以上も見つけることができた。これはひとえに中央図書室の監督官である Mr. D.T. Roger の御助力のたまものである。

カレン族関係の資料については、タイ国にいた時に外国人研究者から、かなり悲観的な見通しを聞かされていただけに、幸い先の良さにわたくしはいささか気を良くしたのである。

このように大英博物館の仕事が一段落すると、わたくしは仕事の本拠を、近くのロンドン大学のSchool of Oriental and African Studies に移すことにする。ここでは事務次長の Mr. Bracken や副ライブラリアンの Mr. B.C. Bloomfield 氏の御援助で、手続きはすべて順調に進む。そして、大学本部から歩いて数分の所にあるトッテンハム 通り 図書館分室に通い出す。ここには東アジアならびに東南アジア関係の図書資料が集められている。東南アジアの係りをしている Mr. Allen Lodge はケンブリッジ大学の出身で、たいへん親切な人であった。そのうえ、ここは公開書架なので、ひじょうに能率的で、10日ぐらいの間に30点

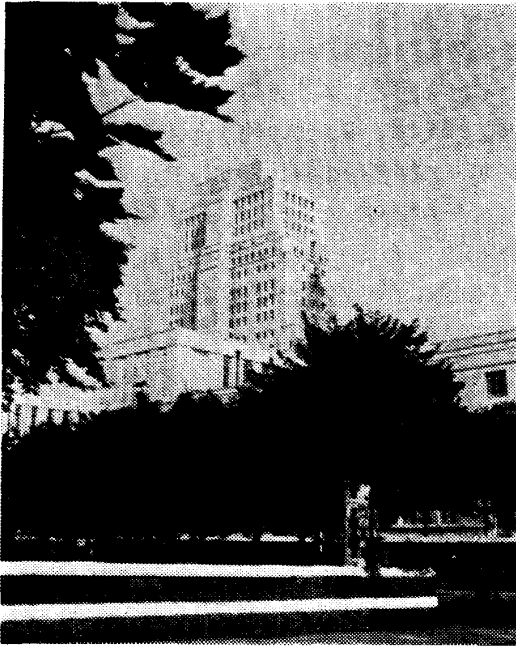


写真3 ロンドン大学の本部

ほどの資料や図書が集った。

このほか、ロンドン大学では夏休みにもかかわらず Mr. Bracken のおかげで、東南アジア・島嶼学科の科長である Professor Eugène J. A. Henderson と Professor Hla Pe, ならびに Reader の Mr. Stewart Simmonds にもお目にかかれた。なかでも、Professor Henderson は5年ほど前に行かれた臼井二尚、棚瀬襄爾、本岡武の三先生のミッションのことをよく覚えておられ、その後の京都大学東南アジア研究センターの発展をたいへん喜んでくださった。

また人類学・社会学科では科長の Professor Christoph von Fürer-Haimendorf と Reader の Dr. Michael Mendelson にお目にかかれた。なかでも、Professor Fürer-Haimendorf は夏休みを過ごされたウインから、客員教授としてメキシコに行かれる途中、3日だけロンドンに立ち寄られた御多忙のなかを、初対面のわたくしに一晩をさいてくださったのにはひどく感激した。同教授に、わたくしが英文で今までに発表した論文を三つさしあげると、全部に目を通して、いろいろと御意見を聞かせてくださった。良く知られているように、Professor Fürer-Haimendorf はアジア大陸の山地民研究については世界的権威だけに、この個人ゼミナールはたいへんに示唆に富み、今後の研究に有益であった。

その後、残された期間にはインディア・オフィス、

王立人類学研究所、王立アジア協会、オクスフォード大学などの図書館で仕事をしたけれども、すでに大英博物館とロンドン大学で数十点以上の文献や資料を集めてしまっているので、かなりの重複があり、期待したほどの成果をあげることはできなかった。

このなかで、資料の点からいうと、インディア・オフィスは圧巻であった。とりわけ、インドやパキスタン関係のものは無限といってよいほど豊富である。しかし、残念なことにカレン族の文献資料になると、これらの領域がビルマの中心部を離れていて、植民地としては経済的重要性がすくなかったために、記録になるような資料が数的にも質的にも他の地域にくらべると、かなりおとっているように思われる。

とはいっても、ロンドンは英領を中心にしたアジア関係の文献資料の宝庫である。カレン族関係でも、1カ月半の短期間に70点以上を集めることができた。そのために、ゼロックスやマイクロ・フィルム代に追われて、内地から送金を受けたにもかかわらず、ロンドンでは完全に破産してしまった。別れの時イギリス人の友人はそれを“Happy bankruptcy”と呼んで、ビールで乾杯をしてくれたのである。そのため、パリーに立ち寄った際には、当時フランスに滞在中の相良惟一教授（京都大学教育学部）にお金を借りる破目になってしまった。そのおかげで、わたくしはとにかくニューヨークに渡ることができた。

アジア財団の配慮で、旅費の半分をニューヨークで受け取ることになっていたために、わたくしはここで一息つく。そのせいもあってか、数年前に初めて来た時にはたいへんに異国情緒を感じたニューヨークも、こんど来てみると、なにか東京に帰って来たような気

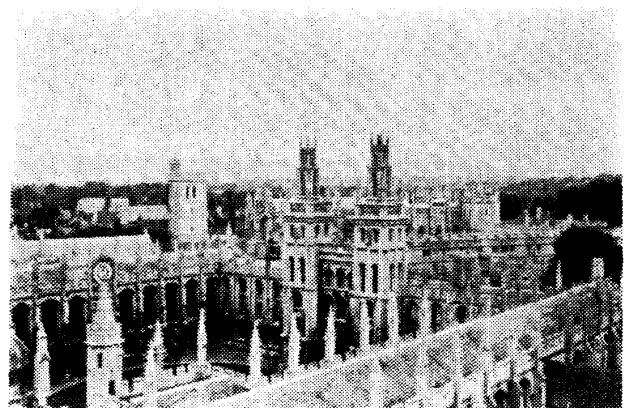


写真4 オクスフォード大学

安さすら感じる。だが、なんといっても物価が高いので、ミッショナリー関係の図書館を見ただけでニューヘヴンに向う。

ニューヘヴンでは HRAF に Dr. Frank LeBar をたずね、タイ国北部における山地民研究について意見を交換する。さらに、同氏のお世話でエール大学の図書館でカレン族の文献を探したが、一、二点を除いてはあまり見るべきものがなかった。

その後、イサカのコーネル大学に行き、仕事をする。ここではタイ国北部で Lahu 族の調査に従事していた Delmos Jones 君が博士論文を執筆中の忙しい日程をさいて、親身になって面倒を見てくれる。おかげで、短時間の滞在にもかかわらず、貴重な資料や文献数点に目を通すことができた。そのなかでも二つの dissertation は、今後の研究にたいへんに役に立つと思う。ひとつは Hackett, William Dunn (1953): "The Pa-o People of the Shan State, Union of Burma," Unpublished Ph.D. Dissertation, Cornell Univ. pp. vii, 736 と他は Truxton, Addison S. (1958): "The Integration of the Karen People of Burma and Thailand into their Respective National Cultures," Unpublished Master's Thesis, Cornell Univ. pp. ix, 123 である。

イサカからわたくしはワシントン D.C. に飛ぶ。イサカではすでに紅葉も終わろうとしていたので、わたくしは寒さにふるえあがっていた。しかし、アメリカはやはり大きい。ワシントンまで来ると、林は色づき始めたところで、その暖い気候にわたくしは蘇生の思いであった。それに、ワシントンはいつ来ても美しい首

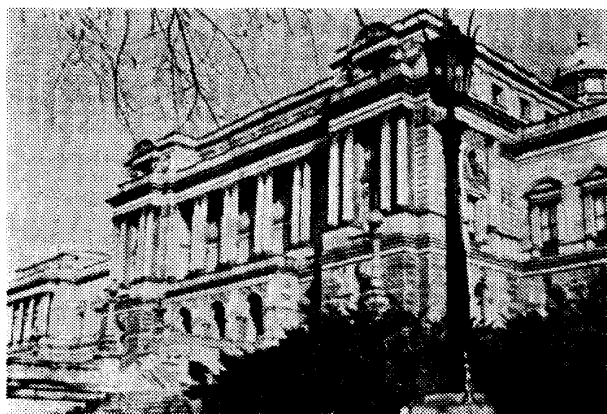


写真5 ワシントンの国会図書館
(アメリカ文化センター提供)

府である。

ここにある国会図書館の文献調査は、わたくしにとっていわば今回のアメリカ訪問の山であり、これが終わると西部の大学で一、二の仕事が残るだけになる。

アメリカの図書館の良いところは、すべてがオープン・システムであることだ。入館手続きなどの面倒がないので、わたくしは付属ビルディングの2階に Cecil Hobbs 氏を直接たずねる。同氏は東南アジア課の課長で、たいへんなビルマ通である。戦前はビルマにおいてミッショナリーの事務関係の仕事をしていたので、カレン族についても一言持っている。おかげで国会図書館における仕事はずいぶんはかどった。今まで集めた資料と重複しない文献類だけでも、30点に近い本や論文を見つけることができ、その大部分をマイクロ・フィルムやゼロックスとして入手することができたのは収穫であった。

このようにして、アメリカ東海岸での仕事をおえたわたくしは、ジェット機でサンフランシスコに飛び、パークレーのカリフォルニア大学の図書館も当たってみた。しかし、カレン族関係の物ではあまり見るべき資料は見当らなかった。

最後にオレゴン州のユージンに行き、オレゴン大学人類学部に Professor Theodore Stern をたずねた。同教授はビルマにおけるチン族の研究とタイ国西部におけるカレン族の調査をされたベテランなので、お目にかかってずいぶん勉強になり、得るところが大きかった。

以上、イギリスとアメリカにおけるカレン族の文献調査をふりかえてみて、気がついたことを二、三述べて、筆を置くことにしよう。

わたくしはタイ国でカレン族を調査したので、タイ国のカレン族に関する資料集めに力をいれたのであるが、その数はきわめて少なかった。これと反対に、ビルマにおけるカレン族の文献は当初予想した数よりもはるかに多かった。その第1の理由は今さらいうまでもなく、ビルマにおいては総人口2,000万人中カレン族はその1割以上をしめ、カレン州やカヤ州の2州を形成するほど重要な民族集団であること。第2の理由はタイ国が歴史的に独立国であったために、外国の植民地官吏や宣教師による記録が他の東南アジア諸国にくらべて、極度に少ないことである。

つぎに、イギリスとアメリカの図書館を大把みに比

較しよう。カレン族関係の文献資料に限っても、大英博物館にしろロンドン大学にしても、19世紀以来のミッション関係の記録を中心に植民地の役人の書いた物まで含めると、古い文献が豊富に保存されていた。それにたいして、ワシントンの国会図書館のコレクションなどには、あまり時代物はなく、もっぱら新しい資料が集められていた。しかし、最近の物なら新聞にいたるまで実に良く整理されていた。

最後に文献調査に関する技術的問題について触れてみることにしよう。

両国の図書館は全体としてひじょうに良く整備されていて、司書の担当者が優秀なうえにたいへん親切であった。そのため、文献調査であまり困ったことはなかった。しかし、仕事をしている間にいちばん閉口したのは、あまり古くも新しくもない物のゼロックスやマイクロ・フィルムを入手することであった。イギリスとアメリカでは多少異なるけれども、著者の死後大体50年もすると著作権は消滅するので、古い本や報告書を複製することは問題ない。また近年に発行された本などの場合ならば新刊がいつでも本屋で入手できるので、一番割安である。ところが、この両者の中間ぐらいの本や資料を手に入れるのにはほとんど手を焼いた。なかでも、とくに太平洋戦争中やその直後に出版された物で、当時の客観情勢のために発行部数が少なかったり、内地にほとんど入っていない文献などにはたいへん困った。ゼロックスやマイクロ・フィルムで入手するのに、いちいち出版社から書面による許可をもらわなければならなかった。しかも、それらの出版社はしばしばどこかに移転したり、なかにはつぶれてしまっているものもある。

著作権の保護はたしかに大切なことであり、欧米の司書の方々が合法精神に富んでいることは尊敬に値する。しかしながら、営利を目的としない学術研究にたいしては、このわずらわしさがなんとかならないものであろうか。

メナム河流域平野の地質調査

高 谷 好 一

1 地質調査にきて

「メナム・デルタの発達史」というのが、わたくしの研究題目であります。もう少しくわしくもうしますと、メナム河とその支流ぞいに発達するセントラル・バレー内の若い地層がいつごろ、どういう材料で形成され、そこにどうした過去の環境が秘められているかを調べるのが目的であります。具体的な作業といたしましては、主として河川ぞいに見られる崖を克明に観察してまわり、必要なところでは砂なり、粘土なりのサンプルを採取するというものであります。行動範囲は地図で示しましたとおりであり、概算で 600 km×150km、採取サンプルは約 100 kg 程度かと思われるま

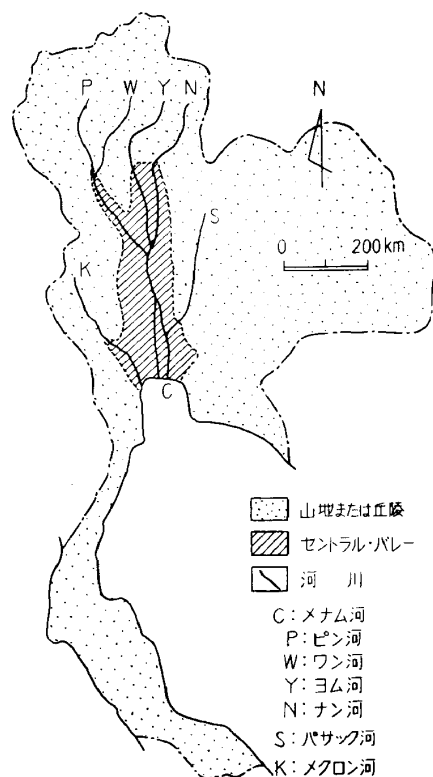


図1 メナム河とセントラル・バレー